●特別対談

近未来のアーカイブを考える

"ノイズ"も後世のために大事なアーカイブ 情報を捨てさせないロジックを作れ

牧野二郎 Makino Jiro

弁護士・牧野総合法律事務所

1953年生まれ。1983年、弁護士登録・開業。1990年、牧野法律事務所開設。日本弁護士連合会情報特別委員会幹事、財団法人インターネット協会評議委員。インターネットでの市民の権利や、商取引での個人保護や認証問題にネット創成期から係わってきた。1996年、インターネット弁護士協議会結成、同代表を務める（2002年2月退会）財団法人国際貿易投資研究所商取引研究会委員、日弁連機関誌「自由と正義」編集委員、日弁連情報委員会幹事を経て現在に至る。近著『Google問題の核心 ～開かれた検索システムのために』（岩波書店刊）では問題解決のための新しい検索システムの提案を行い、Google議論に一石を投ずる。

江﨑 浩 Esaki Hiroshi

東京大学 大学院
情報理工学系研究科　教授

1987年、九州大学工学部電子工学科修士課程修了。同年（株）東芝入社。1990年～1992年、米国ニュージャージ州ベルコア社客員研究員。1994年～1996年、コロンビア大学客員研究員。1998年、東京大学大型計算機センター助教授。2001年、東京大学情報理工学系研究科助教授。2005年、現職、工学博士。MPLS-JAPAN代表、IPv6普及・高度化推進協議会専務理事、日本データセンター協会 理事、JPNIC理事、ISOC（前）理事。工学博士

インターネットの発達が情報の爆発を生んでいる。そうしたなかで、アーカイブは将来をどう見通したビジョンを持つ必要があるのか。
この問題について、アーカイブシステムにも詳しい東京大学の江﨑浩教授と、Google検索問題に取り組む弁護士の牧野二郎氏に対談してもらった。特に、放送業界にも焦点を当ててもらった。

（構成・写真：古山智恵・本誌編集部）

牧野二郎

ノイズは原石だから アーカイブする

牧野二郎 Webや検索について考えるとき、いつもぶち当たる疑問がいくつかあります。先生とその疑問について、まず議論したいと思います。

情報には表に出るものと出ないものがあります。検索対象になるのは表に出ているもの、例えばWebにアップされたものや、企業や役所、学校などで公開している情報です。対して、内部資料や捜査資料、企業のデータベースにあるデータなどは表に出ない情報です。情報総量でみたとき、表に出ない情報量の方がオープンになっている情報量より圧倒的に大きいはずです。そう考えると、オープンになっているものだけに焦点を当てることでいいのだろうかという疑問が出てきます。

二つ目は、オープンになっている情報でさえ検索しきれないのに、オープンになっていない圧倒的な量の情報、つまり人類の記録をわれわれはどう考えるべきなのか。

三つ目は、人類の資産の残し方です。アーカイブするべきものと、する必要のないものがあるのかどうか。現在の価値判断では意味がないと思えるものも、後世では意味を持つかもしれません。とすれば、現在のわれわれの価値で判断するのではなく、後世の人に委ねるべきではないのか。ただし、そうなるとすべてをアーカイブするということになってしまうわけですが。

江﨑先生、オープンになっている情報量というのは全体のどれくらいですか。

江﨑 浩 潜在的にオンラインになっていない情報は膨大でしょう。デジタル化されて媒体に載っているものだけで5%ぐらいではないかと思います。

では、どのくらいアーカイブすればいいのか。国立天文台の例を紹介します。国立天文台は宇宙を休まず観測しているわけですが、あの生データはノイズの固まりです。われわれが見ている画像は画像処理を施して、ノイズを処理したきれいなものです。観測した生データは国立天文台が保存していますが、それには理由があるのです。ノイズの固まりである生データの中に、今の技術では処理できない情報や、知見のまだないデータがあるかもしれない。だから、測定した生データをそのまま次世代のために保存しておく。これが国立天文台の考え方です。これが本当のアーカイブだと思います。アーカイブのもともとの意味はオリジナルですから。

国立天文台はまた、生データのポジション情報をある期間保護しています。これは研究者にとっては大変重要なことで、観測位置がわかると、ほかの研究者がすぐに情報にたどり着いてしまうので、それを防いでいるわけです。情報をどこまで守って、どこからパブリックドメインにするかということがあります。

重要なことは 情報を捨てさせないロジック

江﨑 一民間企業であるGoogleにデータが集中するというのは、牧野先生の関心事でもありますが、情報というのはある程度のマスで集まらないと意味をなしません。だから、情報が集まる仕組みづくりが必要です。その時に、快適な誘引モデルをつくって見せることが大事で、Googleがやったことは、この分野のビジネスを立ち上げるという意味では評価できると思っています。制限しなかったことがかえって良かったのではないでしょうか。ただ、独占が進み過ぎたときにどうするかの政策議論は必要です。

牧野先生が言われているGoogleの情報をどうやってパブリックドメインに提供してもらうかは重要なことで、僕はGoogleが情報をパブリックドメインに提供する準備をしている気がします。それは、Googleの価値はデータベースではなく、すでに処理系に移っていると思うからです。誰が考えても、Googleは情報を持ち過ぎているので、公共財だから出せという意見が出てくるはずです。

牧野 もし、パブリックドメインとして出してくれるのなら、そこから何を生み出すかという競争になるわけです。

江﨑 鉄道も電話も、インターネットの思想そのものが使う権利をユーザー側に提供するものであって、ある意味フェアユースです。ルールに従えば必ず使わせなさいという“たが”を、独占が進んでいくことではめやすくなった。たががはまったときには、その財の上でみんなが多様なサービスができるようになっていくのだと思います。

牧野 ある種の付加価値サービスというか、データを解析してどれだけビジネスに結び付けていくかということですか。

江﨑 そこに放送局や新聞社が乗ってもいいと思います。

牧野 放送局は、取材をしているが放送しない情報や極秘データなど深い情報を山ほど持っていますから、そうした情報も含めて未来の人のためにきちんとアーカイブしておく作業を人類の責務としてやらなければいけないと思います。これは放送局に限ったことではないですし、日本に限ったことでもありません。自分たちのつかんだ情報を、現

時点ではいきなり公開しないというセキュアな状態でどんどんと放り込み、95%の隠れた情報が人類の資産としてアーカイブされていくことが必要です。

江﨑 まさにその通りで、残すための仕組みを考えないといけない。その時に大事なのは公開されないことが担保されるロジックです。

牧野 貴重な財産を保護する制度がないと捨てることになってしまいますから。

江﨑 自分のデータをアーカイブすることに対して、自分が不利益にならないことが担保される。だから、データはきちんと保存しましょうというシステムが必要です。日本は制度設計があまりうまくありません。保存している側に、プロテクションする手段がないから捨ててしまうのではないでしょうか。

NHKの資産を放送界全体で活用するアイデア

牧野 テレビ番組の放送は基本的に1回です。でも、YouTubeではコンテンツが何十万回とダウンロードされています。1回限りというのはもったいない気がします。放送局はYouTubeをもっと活用して全世界の人に作品をアピールしたらどうでしょう。言語の問題もYouTubeなら視聴者が翻訳してくれますので。特に民放は、YouTubeと親和性が高いのではないでしょうか。YouTubeの妙技は、現時点の世の中で何が一番面白いか瞬時に示すことです。横並びの取材をやめ、他局を意識せずに、今一番面白いこと、一番好きなものを見せることに特化していけば、民放はNHKと違うワクワクどきどきするもっと面白いものになると思うんです。YouTubeとテレビ局が一体化していってはどうでしょうか。

江﨑 一つ提案ですが、NHKの番組は国民から徴収した受信料で作られていますから、公共財にあたるわけです。ですから、NHKのコンテンツは民放が請求したらすべて使えるようにしたらいいと思う。再送信権も含めて。もし肖像権を主張するようなら、CGで顔をすげ替えればいい。番組の命であるスクリプトの権利を誰が持っているか。作家がスクリプトの権利を放棄してくれるなら、公共財として何回放送してもいいので、ものすごい価値になります。

牧野 NHKの資産を活用するというのは面白い。ニュースを放送するとき、他局が取材した映像にクレジットを入れて使い、そこに独自の取材を付加する。これは著作権的に「引用」の原則に従う限り、問題はありません。

江﨑 民放は民間企業なので財産にするという概念があってもおかしくないわけで、自局の素材をNHKも含めた他局に売ってもいいと思うんです。

牧野 放送事業自体が発展することにつながるわけでしょうか。

江﨑 その通りです。その方が使えるコンテンツの幅が広がるし、取材コストが削減できて、健全な競争を生むことができます。

ローカル局ならではの役割がある

牧野 ローカル局が疲弊していると聞きます。どうしてもキー局を中心にした議論になりがちですが、ローカル局の役割について、どうお考えですか。

江﨑 ローカルからの情報発信で最初に感動したのは佐賀新聞です。佐賀新聞社は、1997年に世界中で仕事をしている佐賀県民のために記事のデータベースをインターネットで無料公開を始めたのです。これは今でも続いていますが、メディアの制約を別のメディアを使って新しいエリアに発信していく。キー局ばかりに頼っていないで、知恵を絞れば何かできるはずです。YouTubeと組むという手もありますよ。

牧野 ローカル局のすごさは、どんな世代にもリーチできていることです。インターネットを使える高齢者は、今の段階ではそう多くありません。しかし、使い慣れたテレビは別です。放送は、災害が起きて孤立した場合でも確実に届くメディアですから、テレビのようにボタンを押すだけでアクセスできる仕組みさえあれば、それを使ってレスポンスを確保できます。命を守るためにも放送だけは確実にリーチしている、ここをしっかり見てほしい。

法律制度では生命の価値を労働生産力だけで判断しますから、事故の損害賠償を請求した場合、60歳を越えると社会的生産力がないとみなされ、保障がありません。まったくおかしな話ですが……。放送は高齢者をネットワークしているわけですから、高齢者を排除することを止めて、地域の高齢者の労力や経験をもっと活用すべきです。地域にある歴史的文化を東京に出そうとするのではなく、その地域で熟成させ、伝承していく。そうすることが輸出につながり、結果、国力になるんです。

江﨑 文化を継承するのはローカル局の役目です。文化を残す媒体は新聞かテレビなんです。きちんとアーカイブして残していけば、そのうち日本だけでなく、海外とコネクトできるようになるでしょう。ローカル局にはローカル局の役割があるんです。

牧野 ローカル局でしか取れない情報はありますね。話は尽きませんが、本日はこの辺で。ありがとうございました。